

クマ剥ぎ対策を行うことで、クマ剥ぎは近隣に広がるのか？

小橋川祥子・小池伸介（東京農工大）

キーワード：ツキノワグマ・クマ剥ぎ

はじめに

クマによる植栽木への樹皮剥ぎ行動(以下クマ剥ぎ)は日本の北関東、中部、近畿地方などで多く発生しており、森林所有者の経済的損失は大きく、森林所有者の経営意欲は減衰につながると考えられる。主な対策としては立木にテープやネットを巻く、忌避剤を散布するといったものがあげられる。とくに、テープ・ネットを巻かれた立木はクマ剥ぎを回避できることが多数報告されており、多くの森林所有者や自治体によって実施されている。しかしながら、単木防除を実施した立木以外の立木の被害の有無などを調べた研究はなく、単木防除を実施していない立木が被害にあいやすくなっている可能性や、森林全体での被害量自体は減少していない可能性も考えられる。そこで本研究は、クマ剥ぎ対策の実施場所だけでなく、その隣接する小班での被害の実態も調べることで、テープ・ネット巻き対策によって対策した小班および隣接した小班にクマ剥ぎが広がっているかどうかを検証することを目的とした。

調査方法

本研究は、群馬県の東部に位置する桐生市とみどり市で調査を行った。2014、2015年にテープ・ネット巻きを実施した小班とそれに隣接する対策未実施小班において、クマ剥ぎの発生量を算出した。各小班にコードラートを設置し、全立木本数と対策実施後にクマ剥ぎ被害にあった立木本数を数えた。なお、2014年に対策を実施した小班とそれに隣接する小班では、2015年および2016年の被害木を数えることで、対策実施1年後および対策実施2年後の被害量を算出した。また、2015年に対策を実施した小班とそれに隣接する小班では、2016年の被害木を数えることで、対策実施1年後の被害量を算出した。

結果および考察

2014年、2015年に対策を実施した小班（計113小班）のうち、資材が巻かれていない木で2015年以降にクマ剥ぎが発生した小班はなかった。また、対策を実施した小班と隣接する小班（計81小班）のうち、対策実施1年後にクマ剥ぎが発生した小班は2小班（2.45%）で、被害木本数はそれぞれ1本ずつであった。隣接小班において対策実施2年後にクマ剥ぎが発生した小班はなかった。これらの結果から、テープ・ネット巻き対策によってクマ剥ぎが対策した小班では、これまでの報告どおり、被害大きく発生することは認められなかった。また、隣接した小班においてもクマ剥ぎが大きく広がる可能性は少ないことが示唆された。

表. 対策実施後の対策小班および隣接小班でのクマ剥ぎ発生状況.

	対策実施 1 年後に クマ剥ぎが発生した小班	対策実施 2 年後に クマ剥ぎが発生した小班
対策小班	0	0
隣接小班	2	0